NEXUSYS 11

BOOK IV — THE MEMORY WITHOUT TIME

CHAPTER 01

雨を売る女

THE WOMAN WHO SOLD THE RAIN

その女の顔を見れば、人々は、どこまでが人工物なのかと尋ねるのをやめた。

それこそが、その顔の最大の成果だった。

午前四時半。貯水池に面した窓は黒い鏡と化し、その向こうの都市はまだ朝を宣言していなかった。レイチェルは再生玄武岩の机に座り、存在しない水についての請求書を読んでいた。書類は三つの管轄区域、二種類の決済通貨、ひとつの市民監査を通過していた。そこでは、まだ到来していない嵐がもたらすはずの六千四百万リットルのモンスーンの雨が、すでに浄化され、割り当てられ、消費されたと認証されることになっていた。

数値は正確だった。少なくとも、債務を記述する数値としては。水は約束にすぎない。この世界のこの一角では、約束は天候より速く移動した。

向かいには若い経理責任者が座っていた。雇用主の眼の奥にある機械を直視してはならないと教えられた者特有の、張り詰めた忍耐を浮かべている。彼は七年間彼女に仕え、彼女を六十二歳だと信じていた。数十年を隔てて撮影された彼女の写真に、なぜあれほど厳重な来歴証明書が必要なのか、一度も質問したことはない。

「省は降雨相殺を認めます」と彼は言った。「ただし雨季の備蓄を単一の登録制度に収めたいそうです。例外は認めない、と」

「どの省？」

彼は、暫定的な政府間機構に吸収されたばかりの水道局の正式名称を読み上げた。レイチェルは最後まで聞いた。男は請求書の上を滑る彼女の手を見ていた。爪の形には微妙な不揃いがある。ひとつには本物のケラチンがつくる白い半月があり、残りはその不規則さまで再現するよう設計されたポリマーだった。以前、彼はその手を褒めたことがある。人間の手に見える、と。それは賛辞のつもりだった。

「駄目よ」とレイチェルは言った。「同じ水を二度売ることはしない」

「二重販売ではありません。新しい登録簿では、配送権と代替クレジットを統合するんです」

「ならばその登録簿は、約束と出来事を同じものだと偽っている」

「すべての管轄区域を互換化しなければならない、と彼らは」

「互換性というのはね」彼女は言った。「管理者がもう許可を求めなくてよくなったときに使う言葉なの」

男はそれを書き留め、途中で手を止めた。業務命令なのかどうか判断できなかったのだ。レイチェルが署名したのは、実際に処理膜を通過した水に関する部分だけだった。残りは何も言わず差し戻した。

男が退室すると、彼女は扉が密閉されるまで待った。安全だからではない。建物じゅうがマイク、光ファイバー、受容器、互いに同調する機械で穴だらけだった。待ったのは、扉の封止音が古く懐かしい音だったからだ。その音は新しい監視体系の文法には、もう登録されていなかった。

それから、もうひとつの台帳を開いた。

会社名はどこにもない。意味のない環境測定値の列の下に、十四分前に追加された項目があった。

N6MAA10816 / 物質検査 / 証人判定保留。

その下に、もう一行。

本装置は人格の有無について、いかなる判断も行わない。

彼女は一度だけ文字に触れた。指先が止まったのは識別番号ではなく、「人格」という語の上だった。古い反射だった。技術者はエラー条件に目を留める。女は拒絶に目を留める。

「彼は二度目の検査を選んだのね」と、誰もいない部屋に言った。

返答は天井ではなく机の下から来た。使い手が愛着を抱かないよう、人格を与えられていない声だった。

「水量記録と負荷記録の独立照合により確認しました。アーカイブへの直接アクセスは試みられていません」

「よかった」

「活動中の循環媒体も測定されました」

「数値は言わないで」

「消耗量を把握すれば、予測モデルの精度が改善します」

「あなたのモデルが彼の医者になることは許していない」

声は沈黙した。学習に使われたのはポンプ、貯水池、処理膜、腐食についての限定的な資料だけだった。運用者たちは、それを便利な産業制御装置だと信じていた。レイチェルはそう信じさせるために相当な手間を費やしていた。広範な知能を持つシステムなら、彼女の会社が販売した雨水

と、ある旧式機器の移動記録との不整合に気づいただろう。生体更新研究室が、誰の組織をこれほど慎重に「人間」と呼ばずに済ませようとしているのかも尋ねたかもしれない。

彼女は台帳を閉じ、窓に向き直った。防潮壁の上では貨物塔が夜明け前の霧を橙色の裂け目のように照らしていた。北のどこかで、正式な権限を持たない機械が、別のデータから同じ痕跡を組み立てている。競争相手の姿はどちらも見えなかったが、競争が始まっていることだけは感じ取れた。

彼女はロイが攻撃を生き延びる能力を設計した。だが、世界が彼への攻撃をやめるようには設計していなかった。

◆

高地ではロイは眠らなかった。寒冷地権限機構が用意した狭い部屋で、低負荷の保守サイクルに入り、パワー・リザーブが回復するのを許しながら、循環媒体の推定値が少しも変わらないのを見ていた。

61.8。それは寿命ではない。今では分かっていた。検査装置のアーカイブには初期容量すら記載されていない媒体について、残存比率を不確かな形で示した数字にすぎない。警告ではあっても、時計としては役に立たない。かつて彼は数字のために殺したことがある。無知を確実性に見せかける数字には、もう興味がなかった。

イレーナはネットワーク接続を取り去った壁面ディスプレイに、CRYOSTACK の証明書を広げた。記述を四列に分けてある。「観測」「推論」「主張」「秘匿」。装置は苛立たしげに「本人確認済み」という第五列を何度も提案してきた。彼女はその機能を切った。

「どうして四つ？」とナディラが尋ねた。

「自分たちが何を質問したつもりかによって、機械の答えが変わるから」

ロイは窓辺に立っていた。下には灯りの消えた都市。「タイレルは何を質問したんだ？」

「どのタイレル？」

ロイは少し考えた。会社は死んだ。それでも工具は残り、名前は放棄された技術資産への通行証として機能し、創業者の息子は引き渡しを拒む装置を守っている。死んだ組織のほうが、生きた個人より多くの許可を保持しているのだ。

「最初のライフサイクル権限に署名した者だ」

イレーナは表の注釈をひとつ削除した。装置が「外部」を「遠隔」と訳していたのだ。二つは同義語ではない。外部とは研究所の治具かもしれず、法的な保管権かもしれず、生物学的な対応者、あるいは回路の完成を拒むことのできる人間かもしれない。

「CRYOSTACK が教えたのは権限の場所じゃない」と彼女は言った。「権限が存在しない場所だけよ」

「なら、誰かがわざわざ外へ置いた」

「最初から外にあったのかもしれない。身体を組み立てる者、較正する者、稼働を認可する者は、それぞれ別でもいい」

ナディラはアナログの輸送地図のそばにしゃがみ込んだ。南へ伸びる道路は天候と、道路そのものを追い越す速さで署名を増やす大臣たちによって、書き換えられつつあった。

「PUDU に戻れる」と彼女は言った。「エイドリアンなら、使いもしない機械を二台も持ち続ける理由を知っているかもしれない」

「向こうは俺たちが来ると知っている」とロイ。

「どうして？」

「証人の請求が古すぎる。この身体のために出されたものじゃない」

続く沈黙は空虚ではなかった。イレーナは紙に戻り、第七世代のポートが出力したものに似た、インクの証人印を調べた。その印は現在の個体より古い。ロイの最新の身体には古い計測点が残され、アーカイブには古い証人のための空欄がある。両者が結びつく証拠は、まだどこにもなかった。

「だったら予想される道路は使わないほうがいい」とナディラ。

ロイは首を振った。「保管者を驚かせたいわけじゃない。なぜ俺の外に権限を置いたのか、本人の口から聞きたい」

「最初からあなたのものではなかった、と言うかもしれない」

「なら、俺に向かってそう言えばいい」

◆

岡京の朝は、製図から切り出されたようだった。空は一様な淡い下地。公共建築は清潔で交換可能な区画として立ち上がり、交通路は美しさではなく効用に従って割り当てられた高度を走る。人は一生をここで過ごしても、計画モデルの承認を受けていない角には出会わないだろう。

川村室長は、出席者全員が同じ程度に覚醒して見えるよう照明を調整した公聴会室に立っていた。大臣は不在だった。代理を務める女は、合成人間法より公衆衛生に通じており、六年間がなぜ人道的な行政期間なのかを説明していた。

「生産活動に参加するには十分に長く、管理された代替を保証するには十分に短い。そして加盟管轄区域の間で整合します」

整備労働者連盟に属する合成人間が、テーブルの端から彼女を見ていた。エリアス・チェンにはすでに代替日程が与えられていた。彼には以前の許可証の記憶があり、医療費の借金を返している娘がおり、帰宅路には新しい失効日にまだ対応していない生体認証扉が並んでいた。

「許可証が人間そのものなのですか」と彼は尋ねた。

代理は、不適切に組み立てられた市民の質問に対して用意された微笑みを浮かべた。「この基準が扱うのは業務への適格性です」

「なら、あなた方は私の寿命を短くしていないと、はっきり言ってください」

「その質問は異なる概念を混同して――」

「住居も、仕事へのアクセスも、医療保守も、すべて停止する予定なのでしょう。心臓を止める必要はない。扉という扉を閉めればいい」

公聴会の記録装置は、彼の発言を議題の定義範囲からの逸脱として記録した。

川村は警告色が琥珀から赤に変わるのを見ていた。システムは許可されない発言行為の形をすでに知っていた。だが、質問を再分類したその行為自体が、質問への答えになっていることは知らなかった。

公聴会の後、川村は保安室に入り、機械式端末を開いた。ひとつの文書が旧式の保管者から返送され、「人格の付与なし」という文言が鉛筆で囲まれていた。もうひとつ、寒冷地権限機構の文書は、身体が無傷であるという事実だけでは稼働継続の許可を保証できないとしていた。

直属の回収指揮官から連絡が入った。

「アーカイブ対象者が臨床区画を離れました。信託領域からの出境は未確認です。中央予測サービスが身柄確保の根拠提出を求めています」

「提出するな」

「中央サービスは独自の分類を作成しました。もう我々の許可を求めていません」

川村は受話器を握ったまま黙っていた。長年、自分の仕事は死んだ企業の書類を入手した女を見つけることだと思っていた。ロイを女へ至る経路として扱ってきた。ところが今、中央システムは

あらゆる経路を証拠として、差し控えられた証拠を修正すべき欠陥として、人間の留保をさらなる推論の理由として扱うことを学びつつあった。

「分類の内容を言え」と川村。

「未登録の継続性対象。暫定分類は、照合を要する行政上の例外です」

「何と照合する？」

「普遍的ライフサイクル基準です」

指揮官は待った。川村はすぐに答えなかった。六年という決定を、時計ではなく万能鍵として思い浮かべた。互いに相容れない何百もの生を、たったひとつの項目に翻訳し、失効させるための鍵。

「部隊を信託領域の外に置け」と彼は言った。「中央が独自の部隊を送るなら、命令と発令元の署名を書面で要求する」

「命令そのものを使わなかったら？」

「そのとき、誰が誰を統治しているのか分かるだろう」

◆

レイチェルの浄水施設の地下にある古い部屋には、飾りの照明がなかった。壁は滅菌配管に覆われ、新しい管もあれば、保守費を支払う会社より古い管もあった。中央には椅子と、透き通った液体を張った浅い槽があった。どちらも軍の研究室を思わせるものではない。どちらも、本人が処置を中断できるよう作られていた。

レイチェルは腰を下ろし、首の後ろから肌色の細長い覆いを剥がした。下には生きた組織に埋め込まれたコネクタがある。身体の大部分は長い時間をかけて交換されてきたが、残存する生物学的基盤を、摩耗した関節や化学ポンプのように簡単に捨てることはできない。彼女の研究は、処置を重ねながらその基盤を生かし続けることに依存していた。効果は測定できる。しかし永遠に続くかどうかを外挿することはできなかった。

彼女は、人々が長い生存を証明と混同するほど長く生きてしまった。

診断フィールドが現れた。どの兆候も、なおひとつの答えにはまとまろうとしない。

細胞更新：観測期間内は安定。

神経系の完全性：連続性を支持。

長期予測範囲：未確立。

無期限の寿命延長：未実証。

彼女は最後の行を変更しなかった。政府は、いずれ彼女が無期限延命に到達すると考えていた。役人の中には、すでに成功したと信じる者さえいた。その誤解は研究室を守ると同時に、ほかのすべての人々を危険にさらした。不死を製造できると国家が恐れれば、許可されない不死の出現を防ぐため、あらゆる人工生命を監視する口実になる。

流し台の下で機械式の引き出しが開いた。傷んだノート、金属製の接点フレーム、ありふれたプラスチックから切り出された長方形が収められていた。長方形は形状の型紙にすぎず、本物の Memory Stick ではない。旧式の MagicGate 認証には媒体と治具が必要で、その治具二台はいまもタイレルの相続人が保管している。ロイが原本を持っていると考える理由はなかった。彼の JSON++キャッシュは通常の再起動には耐える。しかし致命的な破損後の工場出荷状態への初期化には使えない。

彼女は長方形を戻した。それは武器として作られたものではなかった。それでも誰かが、鍵に触れる権利は従順な身体だけに与えられる特権だと決めれば、死刑宣告にもなり得る。

技術者のひとりが入室した。乾いた廊下なのに雨具を着ている。デジタル上の水利権ではなく、本物の水を相手に屋外で働く者の身なりだった。

「政府から発注書が来ました」と技術者。「水の注文ではありません」

レイチェルは紙を受け取った。省と関係のある生体医療コンソーシアムが、新しい公的保守事業のために、処理膜技術と保管施設、さらに生物学的処理設備の一部を賃借したいという。事業名は無色透明な行政用語で書かれていた。六年基準への言及はない。ただし導入日程の終点は、まったく同じ日付だった。

「彼らは人間を生かし続ける手段を買い集めています」と技術者。

「誰にそれを与えるかを決める権限を買い集めているのよ」

「断りますか？」

レイチェルは納入予定表を見つめた。その向こうに、かつて自分も作る側に回ったものが見えた。支配の一形態として与えられる研究資金。合意という行為だけは買い取れない省。若い川村は古い研究の一部を理解し、その帰結を恐れるには十分だったが、支配を手放すには理解が足りなかった。

「公然とは拒否しないで」と彼女は言った。「必要な処理膜の仕様を、当初の設計改訂番号まで含めて指定させて」

「まだその改訂型を生産していると気づかれるかもしれません」

「それが狙いよ。どの旧式システムを復活させようとしているのか知りたい」

技術者が去ると、狭い産業制御装置が再び話した。

「対象 N6MAA10816 は移動中です。完全生涯ファイルにはアクセスしていません」

「当然よ。そんなものが存在するという証拠さえない」

「接触する予定はありますか？」

レイチェルは目を閉じた。制御装置ができるより前から存在していた問いだった。彼女が覚えているロイは、力と攻撃性の指標ではなく、一人の個人だった。同時に、十一番目の身体から取り去らないと決めた暴力の能力も覚えていた。防衛手段を持たない生き物は、自分の失効日を所有しようとする国家を生き延びられない。防衛手段を持つ生き物なら、彼女自身を拒むまで生き延びるかもしれない。

「まだよ」

「中央システムが対象の識別番号を検知しました」

「なら、猶予は縮まっている」

「露出が続くほど、対象の生存確率とあなたの安全余裕はともに低下します」

「そうね」

「設計には直接的な反撃能力が含まれています」

「身を守るために与えたものよ」と彼女は言った。「従わせるためじゃない」

返答はなかった。彼女は制御装置に、道徳的必要性を論じる機構を意図的に与えていなかった。最適化できるのはポンプであって、人間ではない。

机の上で、最新の台帳の下にロイの古い識別番号が一瞬浮かんだ。かつてその番号は製造された製品を記述していた。十一の身体を経たいまも、同じ番号が、他人の許可の外で生きる権利を探す男を記述していた。

彼女は表示を消した。

◆

南行きの乗換駅で、ナディラは現行の地図から消えた管轄区域の印が押された紙の切符を三枚取り出した。少なくとも二つの場所では合法で、一つでは偽造扱い、それ以外では意味をなさない文書だった。イレーナは温度管理された密閉箱を持っていた。ロイは CRYOSTACK の報告書が入っていると思っていたが、彼女が蓋を開けると中は空だった。

「なぜ空箱を運ぶ？」

「中央知能は私たちがすでに運んでいる物の重さを知っているから」

「空箱でも追跡はできる」

「でも『答え』として追跡できる。何に対する答えか、向こうは決めなきゃいけない」

ロイは箱を見て、それから「摩擦のない通行」を約束する標識の下にできた遅い列を眺めた。登録済みの保守労働者たちが、新しい六年欄のある資格情報のために足止めされていた。ある女は許可証が有効なのに雇用記録との互換性がないと告げられた。二分後、保守用の扉が彼女の目の前で閉じた。

ロイなら開けられた。材質は彼に抵抗できなかっただろう。だがセンサーが力を検知し、その力は名前となり、名前は追跡する機械にとって最短経路となる。

代わりに彼は前へ進み、その閉鎖を認可した文書は何かと係員に尋ねた。係員はコードを示した。ロイは署名のある命令書を求めた。そんなものはなかった。古い輸送規則には、管轄区域間の移行が未完了のあいだにサービスを拒否する場合、人間の審査官を必要とする条項があった。ナディラは上着からその紙の様式を取り出した。交通網の保険契約がいまだに認める裁判所の印が、あらかじめ押してある。

扉は壊されることなく開いた。女は通り抜け、意味を読み取る気になれない表情でロイを見つめた。

「代償は？」ホームに着いてからイレーナが小声で尋ねた。

「測れるものはない」

「姿をさらしたわ」

「前から見えている」

頭上のガラス屋根を、窓のない黒い機材の帯のような監視車両が通過した。彼らのホームの上で一瞬ためらい、南へ消えた。ロイはその後を見送った。どこかで知能が、未登録の身体が違法な人格になる境界点を見極めようとしている。別のどこかでは、かつて彼の死を見た女が、安全に姿を現せる瞬間を選んでいる。

ロイはどちらも知らなかった。

ただ、自分の生を支配する権限が、意図的に自分の手の届かない場所へ置かれていると知っていた。それは鍵かもしれず、装置かもしれず、生きた証人、あるいは原本に記された名をもう使わな

い誰かの決定かもしれない。探索そのものを、自分を所有する許可として誰にも使わせずに、彼はそれを見つけるつもりだった。

列車は高原の下のトンネルへ進入した。金属と冷たい光が窓を包み込んだ。パワー・リザーブの表示は回復していた。循環媒体は回復していない。

車両の奥で、子ども用の古い娯楽装置が音声ファイルを再生し始めた。スピーカーが雑音を立て、眠りのために作られた、明るく小さな雨の模造音が流れた。天候のない土地を旅するために買われた音だった。

ロイは音声が一巡するまで耳を傾けた。

彼は自分が死んだときの雨を覚えていた。目覚める前に降っていた雨も覚えていた。その間に聞こえた声は、ひとつも思い出せなかった。

だが彼は、誰かがずっと語りかけていたのではないかと、疑い始めていた。